

現代剣道における精神論と剣道とは Current kendo theories

1K09B048 甲斐勇太

指導教員 主査 寒川恒夫先生

副査 瀬戸 邦弘先生

【はじめに】私は、小学1年生からこれまで剣道を続けてきたなかで2つの疑問が生じた。ひとつ目は、剣道の試合を行う上でどのような精神状態、心構えがもっとも良いのかということである。剣道という競技は私のこれまでの経験上では、精神面が勝敗を決するのに大きく影響すると言ええる。そのため実績のある強豪選手が格下の相手に負けてしまうという試合が剣道の大会ではよく見かける。そこで、試合をする上でどのような精神状態で臨むのがよいのかということが非常に気になった。2つ目は、剣道とは何のために行うのかということである。よく剣道は人間形成の道であるということを耳にするが実際には野球やサッカーなどのスポーツとどう違うのかということ判断することが難しい。そこで、剣道がなぜ人間形成の道に繋がると言われるのかということを確認し、剣の道というものをこれから考えていきたい。そして、今後の剣道に対する取り組み方、剣道のあり方を考えていきたい。

【第1章】第二次世界大戦の敗戦は、それまで隆盛をきわめた剣道界に潰滅的な打撃を与えた。すなわち日本占領の連合軍当局はポツダム宣言の線に沿ってわが国の政治、経済、宗教、教育、そのほかあらゆる分野にわたって思い切った改革を実施したが、教育制度に関する改革はその最も甚だしいものの一つであった。その嵐の中にあって剣道は日本の弱体化の一方策として最もひどい弾圧を受けたものであった。1952年講和条約により日本の独立の回復とともに剣道界も全日本剣道連盟が結成され再出発することができた。全日本剣道連盟が結成されてからは、「剣道の理念」の設立、試合審判規則の一新により、剣道愛好者が増え、同時に世界的に剣道が広まった。これらとともに時代の流れによって剣道がスポーツ的な一面を持つようになったのである。

【第2章】ここでは剣道の発達と本題である精神論と大きく関わる宗教の関係性について述べていく。古来の剣道は明らかに生死を決し、勝敗を明らかにするところの武道であった。つまり、生死を越え、勝敗にかかわらず真の人間を完成する道としての武道であった。山岡鉄舟翁が門人を指導するのに「剣術の達人になるには、生の執着を断ち切る修練が何よりも肝要だ」とさとしたように、生死のきずなを断ち切って生死を越えたいのちの根源を明らかにしなければならないのである。剣道史上もっとも興味のある宮本武蔵の剣

の極意は、「巖の身」と呼ばれ、生死の両頭を脱した、寂然不動、八風吹けども動かず、大矢屑るるともこゆるぎもしない絶対境のことである。巖の身は、個我に執着して生死を超脱しなければならないものである。ここでの剣の心構えとして重要なことは、「生への執着を断ち切る」ことなのである。現代剣道に置き換えると、「負けるということを恐れないということではないだろうか。

【第3章】第3章では、田舎荘子の語る剣の極意である猫の妙術。これは、古猫が剣の極意を説く一編である。この古猫の説く剣の極意は、三つある。ひとつ目は、気を練りに練って、澄み渡り、冴えるところまでいかなければならないということである。二つ目は、技の習得の中で大切なことは、その技の真理や道理を知ろうとすることである。三つ目は、思慮分別を断り、無心無偽に随って動くということが大切であるということである。以上の三つが猫の妙術による剣の極意である。

【考察】全日本剣道連盟が結成され、現代の剣道が成り立っている。しかし、この現代剣道はスポーツに近いものと変化してしまった。古来の剣道というものは、生死決定の道であり、勝敗にかかわらず真の人間を完成するものであった。この古来の剣道から現代の剣道に活かすことができることが、生への執着を断ち切るということである。現代剣道に置き換えると、負けることを恐れないということではないだろうか。剣道とは剣を学ぶことで、人間そのものの「道」を体得し、それ自身に目的価値を持つところの尊厳なるものである。つまり、これこそが「人間形成の道」なのである。今後の人生において、さらに剣を学び、私自身の「道」を体得したい。剣道をやる上で大切な心構えや精神状態を私の今後の社会人としての人生に活かしていきたいと考えている。活かしていくということは、剣道から学びとったことを生活の中で自由自在に扱っていくということである。こういうことが剣道の本質ではないかと今回の研究を通して感じた。最後に、この研究を通して感じることでできた剣道の素晴らしさや剣道をする目的、剣道をする上での心構えを少しでも多くの人に広め、剣道の普及振興に貢献していきたいと思う。